2024年度日本語教育学会春季大会
大会若手優秀発表賞（口頭発表）受賞コメント

武中清香（一橋大学大学院生）

この度は、大会若手優秀発表賞を授与していただき、誠にありがとうございます。このような名誉ある賞をいただき、大変光栄に存じます。

本発表は、YNU 書き言葉コーパスから日本語・中国語・韓国語母語話者のテミルの使用傾向について分析をおこなったものです。母語話者と学習者の作文を比較することで、テミルが産出された一文を見るだけでなく、作文中のテミルの出現位置やタスクの内容から、運用上または文脈上の不自然な産出や誤用を明らかにすることを目的としました。

そもそも補助動詞テミルに関心を持ったきっかけは、私が学部時代に韓国に留学した際、韓国人の友人たちの会話や SNS 上でのやりとりの中で、テミルに対応する韓国語の補助動詞 boda が多用されていることが気になったからでした。boda はテミルと対応しているにも関わらず、日本語に直訳するとテミルで表せないものもあり、使用のずれが見られます。そこから補助動詞テミルの日韓対照研究を始めましたが、自身の教育経験の不足から、学習者や学習者の使用を対象とした研究に踏みこむことに躊躇しておりました。しかし、博士課程に入学し、やはり日本語教育の観点から分析するには、学習者の使用傾向を分析する必要があると思い、今回の研究に取り組み始めました。また、このような不自然な産出や誤用は韓国語母語話者だけでなく、ほかの母語話者にも見られると感じ、現在も補助動詞テミルの研究を進めております。

日本語教育の観点から文法を研究することの難しさや葛藤を感じる日々ではありますが、難しいことに取り組むことの楽しさもあります。おそらくこの先もずっと考えていくことになると思いますが、日本語教育で文法を研究する意義を自分なりに見出し、さらに有意義な研究を進めていけたらと思っております。研究者としても日本語教育に携わる者としても、まだまだ未熟ではありますが、学習者と向き合い、教室での活動も大事にしていきたいです。そして、研究面においてもより精進していきたいと思っております。

最後に、今回の大会運営を支えてくださった大会委員の先生方、貴重なご質問やご意見をくださった先生方に感謝を申し上げます。また、ご多忙の中、熱心に指導してくださる指導教授の庵功雄先生をはじめ、一橋大学の先生方、また支えてくださる先輩方、友人たち、そしていつも親身に研究相談にのってくださる勉強会の仲間に深く御礼を申し上げます。

2024年度日本語教育学会春季大会
大会若手優秀発表賞（ポスター発表）受賞コメント

夏　雨佳（東京外国語大学・大学院生）

この度は、大会若手優秀発表賞という栄えある賞をいただき、誠にありがとうございます。

本発表は、日本語母語場面・中国語母語場面・日中接触場面の知り合いの二者会話の雑談に見られるナラティブの反応部と後続話題に着目し、語り手と聞き手の役割交替と協働構築の特徴を比較分析したものです。会話データは、日本語母語場面・中国語母語場面・日中接触場面における知り合いの二者会話の雑談を20分程度、それぞれ4グループ収集し、計12個の会話を分析しました。分析の結果、まず、日中接触場面のナラティブの反応部では、学習者は聞き手として相づちのみで反応し、母語話者の語り手が自ら話題を継続していく様子が見られました。次に、日本語母語場面のナラティブの反応部では、語り手と聞き手が意見交換をしたり、聞き手が相づちや評価表現を用いたりした後に自身の類似体験を語る様子などが見られました。一方、中国語母語場面のナラティブの反応部では、聞き手がナラティブに対する反応をせずに、より唐突に自分の類似体験に対する感想を述べる様子が観察されました。この結果から、日中接触場面の反応部において、学習者の聞き手としての反応が薄い原因は、日本語能力の問題も考えられますが、中国語母語場面に見られた、相手のナラティブに対して、自分の類似体験に対する感想をコメントとして述べるという母語の影響もあると推測できました。

日本語の会話教育が益々重視されてきている現在、学習者が接触場面の会話において、よりよいコミュニケーションを取り、人間関係がうまく形成できるように、様々な会話場面が取り上げられて分析されてきています。その中でも、特に人間関係の形成に影響を与えうる行為として、自分の経験をナラティブとして語って会話相手と共有することが挙げられます。そのため、接触場面において中国人学習者が語り手・聞き手として構築するナラティブの特徴を明らかにした上で、それを日本語母語場面と中国語母語場面におけるナラティブの特徴と比較し、それらの相違点が生じる原因を探る必要があると考え、今回の発表に取り組みました。

今後は、日本語母語場面・中国語母語場面・日中接触場面の雑談に見られるナラティブを対象とし、ナラティブの種類と機能、開始部と先行話題における語り手・聞き手行動の特徴と相違点なども明確にして、その知見を日本語会話教育に活かすことを目指したいと思います。

最後に、いつも温かくご指導いただいている中井陽子先生をはじめとする東京外国語大学の先生方並びに、大学院生の皆様、学会で貴重なご意見をくださった皆様、研究と原稿執筆の段階でご協力くださった皆様に、心より感謝申し上げます。

〔2024 年度日本語教育学会春季大会（オンライン開催,2024.5.26）口頭⑰〕

YNU 書き言葉コーパスから見る補助動詞テミルの学習者の使用傾向に関する一考察

武中清香

本発表は，YNU 書き言葉コーパスを調査し，日本語・中国語・韓国語母語話者のテミルの使用傾向について分析する。母語話者と学習者の作文を比較することで，テミルが産出された一文を見るだけでなく，作文中のテミルの出現位置やタスクの内容から，運用上または文脈上の不自然な産出や誤用を明らかにすることを目的とする。

母語の違いに限らず、読み手に何か行為を勧める場面があるタスクでは，「ぜひ～てみてください」「～てみてはいかがですか」のように，テミルの出現数が多くなった。出現数では中国語母語話者が最も多く，また韓国語母語話者はすべてのタスクでテミルの産出が見られた。韓国語母語話者のテミルの誤用は，テミルに対応する韓国語の boda が，韓国語で高い頻度で使われることの影響だと考えられる。さらに，作文から分析したことで，前後の文脈とテミルの出現位置から，単文からは判断が難しい学習者の不自然な産出や使用傾向が明らかになった。

（武中－一橋大学大学院生）

〔2024 年度日本語教育学会春季大会（オンライン開催,2024.5.26）ポスター⑭〕

ナラティブの反応部と後続話題から見る協働構築

―日本語母語場面・中国語母語場面・日中接触場面の比較―

夏雨佳

本研究では日本語母語場面，中国語母語場面と日中接触場面の知り合いの二者会話の雑談に現れるナラティブに着目し，その反応部と後続話題における語り手と聞き手の役割交替と協働構築を分析した。その結果，日本語母語場面では，語り手と聞き手がナラティブの反応部で意見交換をしたり，聞き手が相づちや評価表現を用いたりした後に，聞き手が語る類似体験の第二のナラティブが見られた。それに対し，中国語母語場面では，ナラティブの反応部で同じく語り手と聞き手がお互いの認識を確認するための意見交換が見られたものの，聞き手がナラティブに対する反応をせずに，より唐突に自分の類似体験の第二のナラティブを導入する様子も見られた。さらに，接触場面では，学習者が聞き手として反応部で相づちのみで反応し，母語話者の語り手が自ら後続話題を継続していく様子が見られた。これらを踏まえ，ナラティブを扱った会話教育に関する提言を行った。

（夏－東京外国語大学大学院生）